

Hearn: the Last Hunter

and other stories

[編] ブラッドレー・ボンド

Bradley Bond

[訳] 本兌有+杉ライカ

Honda Yu+Sugi Leika

妖怪五十面

ハー・ザ・
ラスト・ハンター

アメリカン・オタク小説集

あなたのニューロンを直撃する
試し読み小冊子

★収録短篇の中から、「エミリー・ウイズ・アイアンドレス」を一部掲載



エミリー・ウィズ・
アイアンドレス
〜センパイポカリプス・ナウ〜

Emily with Irondress

エミリー・R・スミス
Emily R. Smith

収録短篇の中から、
ハイスクール・センパイ・巨大ロボット・
吸血鬼・アクション・ロマンス
「エミリー・ウィズ・アイアンドレス」
を一部掲載します

第27話 運命の慟哭しょうこく

これを読んでる全ての人へ、こんにちは。私の名前はエミリー・ラストイゲイツ。オレゴン州ポートランド生まれ。高校二年生。父親は誰だかわからない混血で、母親の英語もスラヴ訛りだった。髪の毛は黒、肌の色は雪のように白くて、瞳の色はシャイニー・ジェットブラックでもその奥にときどき、赤い炎のようなきらめきが走るから、クラスの皆は私のことを気味悪がる。私はべつにゴスじゃない。でも正直に言うと、スクールカーストの最下層で、誰にも相手にされなかった。でもそれは、私が、自分の本当の価値に気付いていなかっただけ。私の中の価値を信じる勇気が、ほんの少し足りなかっただけ。六ヶ月前、交換留学生として東京のシブヤ・センパイ・ハイスクールに転入した時から、私の錆び付いていた運命の歯車は回り始めた。私の本当の名前は、エミリー・フォン・ドラクル・イチゾク・ラストイゲイツ・ザ・ドーンブリンガー・M¹22。数千万人に一人が持つ特殊遺伝子、ウンメイテキ・ジーンの持ち主であり、富士山の火口から攻め寄せてくる人類の敵、邪悪なカイジュウ・マインドに対抗する力を秘めた、この地球にとっての最後の希望、だった。……でも、センパイ、ごめん。私はもう、戦えない。

「エミリー＝サン！ 急いでアイアンドレスの操縦に戻ってください！ 東京が崩壊しま

す！」トキヨシセンパイの声が通信機越しに聞こえてきた。彼は史上最年少で東京大学の機械工学博士号を取ったトワイライト・オニ機関の主任研究員で、今日は白衣にブルーセルの眼鏡をかけている。彼は研究机の上に密かに置いていた写真を見ながら、机を叩いた。「それに、君にもしものことがあったら！ 私は！ 私は！」

「もう無理よ！ もう戦えない！」私はコックピット・ハッチを内側から開き、耳を塞いで、泣きながら外に飛び出した。深い哀しみと無力感という名のエッセンスで満たされた、小さなダイヤモンド粒のような涙がいくつも、シブヤの空に散っていった。「G A R R R R R R R R R R G H！」五キロ先の地点では、アポカリプス級カイジュウ「ボウリョク」がビル街を容赦なく破壊していた。

「待つんだエミリーサン！ 途中で投げ出して、祖先に申し訳ないと思わないのか！」後方から、私を呼び止めようとするオニヤシャセンパイの厳しい声が聞こえた。オニヤシャ・タケシサンはシブヤ・センパイ・ハイス쿨の風紀委員長を務めるアルファ・センパイであり、オニヤシャ・コーポ社の御曹司おんざうしであり、ウンメイテキ・ジーンを持つ選ばれし者だ。私とのニンバオリ・システムで、この運命重機兵アイアンドレスを動かすパートナー・センパイだ。このアイアンドレスの正式名称は、ジュウ・ニ・ヒトエ。その見た目は黒いドレスのように繊細だが、驚くほどのしなやかさとスピードとパワーを持つ最高の機体だ。二本の美しいカタナをふるって戦う、全長五十メートルの私の鎧だ。でも、もう、終わったのだ。私は避難警報が鳴り響くシブヤ・シテイを走りぬけ、シブヤ・センパイ・ハイス쿨に向かった。

◆

事の発端は、三日前の朝にさかのぼる。遅刻しそうになっていた私は、トーストを食べながら高校へと走っていた。その時、私は見てしまったのだ。オニヤシャ〓センパイがロッカーの中から、一通のラブレターを取り出しているのを。それを離れた場所から見ていた私は、シヨックのあまり心臓が音を立てて碎けそうだった。日本では、女子が男子に対して想いを打ち明けるとき、ロッカーの中にラブレターを入れておくのだ。そしてたいいていの場合、その日のラントブレイクや夕方に、校内のどこか人気がない暗い場所に相手呼び出し、直接的な行為に及ぶのである。私はラブレターを盗み見て、それが午後五時であることだけは突き止めた。

私は放課後になるとすぐに、センパイの後を尾行した。センパイは忙しく、五時ギリギリまで生徒会室で作戦会議を行っていた。そして運命の時間が訪れた。私は一足先に校門の外に出て、そこでセンパイを待っていた。そして彼がエントランスの時計台の下に姿を現した、その時……一台のバイクが私の横を通り過ぎた。それはトワイライト・オニ機関のイチゴ大佐だった。イチゴ大佐は二十六歳で、大人の魅力を持っているし、身長も一七〇センチある。彼女はオニヤシャ〓センパイの横にバイクを止め、何かを耳打ちした。きつと、愛の言葉を囁いたのだろう。そして、花束を手渡したのだ。五時を告げる大時計が鳴り響き、オニヤシャ〓センパイは花束を持ってバイクの後ろに二人乗りした。二人は一台のバイクで走り去った。二人ともヘルメットを被り、表情はうかがい知れない。でも、きつと恋の喜びに満ち溢れていたはずだ。

私は見つからないように、すぐに身を隠した。そして、呆然と立ち尽くしていた。

……これが、三日前に起こったこと。次の日、私はセンパイに、昨日一緒に下校できなかったことを聞いてみたが、オニ機関関連で急な用事が入ったとしか答えてくれなかった。確かに、オニ機関の用事だと言われれば、私は何も言い返せない。私はオニヤシャ〓センパイにイチゴ大佐との関係を問い直すこともできず、私とセンパイの関係はギクシャクしたものになり、アイアンドレスの操縦も全くうまくいかなかった。そして、今日のこのありさまだ。私は愚かな負け犬だった。センパイの口からその事実を聞きだしてさらに惨めな負け犬になるのは、絶対に嫌だった。

私は誰もいないシブヤ・センパイ・ハイスカールの二年S組の机に突っ伏し、静かに泣いていた。もうすぐ、ここもカイジュウに破壊され、私の体をその奥底に収めたコンクリートの柩ひつぎに変わるだろう。もうそれでいい。全てが終わればいい。二十歳になったら全ての想いを打ち明けるというオニヤシャ〓センパイの約束の言葉は、そして私に対する気持ちは、ぜんぶ汚い嘘だったのだ。トワイライト・オニ機関も、しょせんは汚い大人たちが金儲けのために作った組織で、私は運命の糸に操られるだけのマリオネットなのだろう。もしかすると、オニヤシャ〓センパイも操られているだけなのかもしれない。でも、どうでもいい。もうやめだ。

「エミリー〓サン」その時、私を呼ぶ声が聞こえた。みんなもう避難して、誰もいないはずの校舎なのに。

「こんなところで、何をしてるんだい？」それはクラシック音楽のように落ち着いた深い声と

物腰だった。薄いアイスブルーのストレート長髪。長身で容姿端麗。だけど私はそいつの本性を知っている。それは三年A組に転校してきた京都吸血鬼の一族、コウキ・イチゾク・イルカだった。彼は教室の戸口のところに立って、私に呼びかけていた。

「いまさら、私みたいな負け犬に何の用かしら？」私は涙を隠しながら、顔を上げた。私はこいつが嫌いだけど、それにしても、ちょっと言い方は冷たくて無作法だった。「こんなところにいたら、死んじゃうわよ。あなたも避難したら？　いくら吸血鬼でも、カイジュウには勝てないでしょ？」

「君はここで死ぬつもりだね、オニヤシャ・タケシが、トワイライト・オニ機関のイチゴ大佐と特別な関係を持っているから」コウキは私の横に歩み寄り、少し強引に手首を掴んだ。「なんでそれを知ってるの……!」「僕はなんだって知っているよ。そして、それは君の誤解だと教えてあげに来たのさ」「誤解?!」

**オニヤシャ・タケシにパイにコソコソされたと思ったのは
勘違い? でも吸血鬼のコウキからも迫られて、
いきなりあんなことまで……?!**

**アメリカ的中二病炸裂のジエットコースターロマンスの
続きは今すぐ物理書籍版で♥**



「ハーン・ザ・ラストハンター」
筑摩書房特設サイト



ブラッドレー・ボンドの刊行記念
インタビュー、更なる試し読み
コンテンツなど続々更新中!

<http://www.chikumashobo.co.jp/special/dhtls/>

ハーン・ザ・ラストハンター 筑摩書房 検索



最新情報はこちらでチェック
@CHIKUMADHT